
おかえり　（十年後リボ夢？）

峰春秋人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おかえり（十年後リボ夢？

【Nコード】

N7294N

【作者名】

峰春秋人

【あらすじ】

一ヶ月も帰ってこないリボーンを待つ青年。
いつになれば帰ってくるの？

(前書き)

リボーンカッコ良しW

「じゃな。」

リボーンあの笑顔がまだ脳裏に焼き付いている。

もう一ヶ月も経っているのにリボーンはいまだに帰ってこない……。

連絡してもつながらないし心が締め付けられるほど心配だ。

「大丈夫？」

「あ……綱吉様。」

白いスーツを整えながら綱吉様が僕の顔を覗き込んだ。

その顔は心配そうで今にも泣きそうだ。

昔から変わらない……。

仲間のこととなるとすぐに昔のような泣き虫になってしまう。

「本当に平気？琥珀くん。」

「はい。リボーンはすぐに帰ってきますよ。」

何回……何回このセリフを口にしたのだろうか？

そんなのもわからないくらいもうリボーンは帰ってきていない。

「すぐ」ってどのくらい？「もう少し」ってどのくらい？

教えて。ねえ、リボーン。

「……。」

「十代目。そろそろ会場に向かいましょう。」

「うん。」

「心配なんですか？」

「だって・・・本当にリボン何日も帰ってきてないんだもん。」

小走りでやってきた獄寺に話しかける綱吉の目は琥珀から全く離れず心配していた。

獄寺も少し琥珀に目をやって心配そうにするが、すぐに首を振ると大きな声で言ってみせる。

「平気ですよ。リボンさんはそんな人じゃないですから。」

「・・・そうだね。」

少し綱吉も元気を取り戻すかのように笑う。

獄寺は何も言わずに歩きだす綱吉の後を追った。

体育座りでホールのソファーでリボンの帰りを待つ琥珀を横切るものは目にしては心配そうな顔をする。ここ何日か琥珀やほかのみんなはこんな感じだ。

「琥珀！」

いきなりホールに響く怒鳴り声に近い声に琥珀は肩をびくつかせながら顔を上げた。

そこに立つのは銀髪と黒い服が特徴のスクアーロだった。

「スクアーロ・・・。」

「何をそんなにへこんでるんだ！」

「・・・。」

「本当にどうした？」

珍しくスクアーロは隣に座ると顔をのぞくように尋ねる。

琥珀はじつと下唇を噛む。

「アイツか……。」

「うん。帰ってこないから……。」

スクアーロはしばらく黙ったままで何かを考えていたらしい。

琥珀はじつとじつと悲しげな眼でどこかを見つめていた。

すると、いきなりスクアーロが手を叩いて不器用に笑って見せた。

「いっぱい心配しとけ。」

「……え？」

不思議そうな顔をする琥珀を見てスクアーロは困ったような顔を
する。

目をそらして頭をかくと小さな声で言った。

「だから……いっぱい心配して帰ってきたときに思いっきり怒っ
てやれ。で、いっぱい甘えろ。」

「スクアーロ……。」

「帰ってくるって思ってたれば帰ってくる。ボスもいつもそうだ。」

（スクアーロはやっぱりボスが一番信頼できるんだ。）

と琥珀はしみじみと思う。

スクアーロはそれだけ言うのと立ち上がって琥珀の頭をくしゃくしゃ
と撫でると去って行った。

「ありがとう……。」

小さくつぶやくとさっきまでのかなしい気持ちがふっとんで逆に元
気になってしまった。

体もさつきよりも軽くなっていた。

琥珀はいつもの調子で自室へと戻る。

廊下をずっとずっと歩くと突き当たりが出現する。それを右に曲がってもっとまっすぐ行くと琥珀の部屋は合った。

ランボの隣の部屋でよく間違えてランボが入ってきたりする。

ドアノブを捻ってゆつくりと押す。

部屋はシンプルなデザインで棚にはぎっしりと本が詰められている。床に入りきらなかった本も何冊か束ねてある。

「はぁ・・・。」

どっと疲れが押し寄せて思わずベッドに倒れ込む。ふかふかした洗いたてのシーツを強く握る。

「リボン・・・。」

そうつぶやいて目を閉じるとすぐに眠ってしまった。深く、深く・・・リボンが帰ってくるまで・・・。いつそこれが夢であればいいのと思うように。

そこは真っ白な部屋。

見覚えもない、何もない部屋。

琥珀は立っていた。

「・・・どこ？」

きよろきよろとあたりを見渡して見るもののあたり全体が白で埋め

尽くされているのでわからない。
どんどん心配になって思わずしゃがみこむ。
頭を抱えて夢が覚めるのを待つ。

「覚めて。お願い。」

けれど、夢は覚めてくれない。

琥珀は怖くなった。これから自分に悪夢が訪れるのではないかと思うと怖くてしかたない。

「琥珀。」

誰かが呼んでいた。

空耳と思つて琥珀は顔を上げなかった。

「琥珀。」

今度ははっきりと聞こえた。

けど、琥珀は顔を上げるのが怖くてあげなかった。

「琥珀。」

その声は近くずいていた。

琥珀はもっと怖くなって目をぎゅっとつぶって頭を抱えた。

「琥珀。」

「いや……。」

「琥珀。」

「やめて……。」

どンドン近付く声に琥珀は抵抗することもできずにただ「いやだ。」
と言いつけた。

声になど耳も傾けずに叫ぶ。

「やめて・・・やめて・・・いやだ・・・。」

「琥珀。」

「いやだ・・・いやいやいやいや。」

「琥珀。」

「や・・・やめてやめて。」

声はついに琥珀の後ろにきた。

「琥珀。」

肩に手が置かれた。

琥珀は心の底から叫び声を。

「いやあああああ！！！！」

「琥珀！！」

声も叫んだ。

琥珀の名前を。その叫び方、声に琥珀は聞き覚えがあった。

安心する手の温もりに、声のトーン。

今まで気づかなかった自分が馬鹿のようにも思えた。

ゆっくりと顔をあげて目を開く。

「琥珀。」

そこは自室で琥珀はベッドの上にいた。
目の前にいたのはもちろん声の持ち主。

「……。」

驚きを隠せない琥珀の前に声の主は不思議そうな顔で首をかしげた。

「何をそんなに驚いてる？」

「リボーン……どうしてここに？」

「ん？いちゃ悪いか？」

「……リボーン！！」

「のわぁ！？」

いきなり飛び付かれてリボーンも思わず倒れそうになる。
顔をぐしゃぐしゃにして琥珀はぎゅっとリボーンを抱きしめた。

「リボーン！リボーン！！」

「なんだ？」

「どこに行ってたのさ！？心配したんだよ！！」

「……人の話聞いてたか？」

「ほへえ？」

「……はぁ。」

呆れたように溜息を吐くリボーンを見て琥珀は首をかしげる。
帽子をとりながらリボーンは話した。

自分がなんで出かけていたのか、どこに出かけたのか。

「……って言ったの覚えてないのか？」

「……。」

「琥珀？」

「言つてたような、言つてないような。」

「・・・情報部のお前がそんなにいいのか？」

呆れた顔をされてしまい琥珀は思わずシュンとする。

けど、すぐになつこりと笑つてリボーンに優しく抱きつく。

「リボーン。」

「ん？」

「あのさー。」

「なんだ？」

ぎゅつとぎゅつと強く抱きしめてくれるリボーンの胸の中は温かくて琥珀は涙をこぼしそうになる。

けど、ぐつとこらえてずつと言いたかった言葉を言つてやる。

「おかえり。」

リボーンもわかつていたのだろうかになつこりと笑つて優しく頭をなでる。

「ただいま。」

苦しくても、悲しくてもすべて彼が包んでくれる。

包まれたものは嬉しさと、喜びに変わつて彼女の一部になる。

そうして、二人は成り立っているのかもしれない。

どっちかが欠ければ、もう一方も欠けてしまう。

「今度からはちゃんと話を聞け。」

「はい。」

「・・・今俺はなんて言つた？」

「えーとね・・・私の話をしっかり聞く？」

「・・・おい。」

「ほへえ？」

(後書き)

やっぱりリボーンはイケメンww

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7294n/>

おかえり （十年後リボ夢？

2010年10月28日08時08分発行